

開く社会、閉じる社会



富 永 厚



閉じる社会、開く社会

——ベルクソンの社会倫理思想をてがかりにして——

富 永 厚

まえがき

ベルクソンはノーベル文学賞を受けた翌年、1932年に、最晩年の主要著作『道徳と宗教の二源泉』（以下『二源泉』と略記）を刊行した。ときは1930年代の初頭。1929年の世界大恐慌にはじまる社会の混乱は、大量の失業、貧富差の拡大、ファシズム的集団主義の台頭と個人主義の無力化、スターリン的な強権主義の横行、ナショナリズムの進行にともなう国家間・民族間・人種間の紛争の激化、ワイマール体制の崩壊や社会民主主義の右傾化、国際連盟の変質、テラー・システムに代表される大量機械生産の勃興、ニュー・ディール政策にみられる政府による公共投資を通じての景気浮揚等々、政治・経済の分野を中心として、世界の動向に深刻な変動を引き起こした。このような新たなマス・ソサエティーの到来という時代の転換点において、人類は重大な選択の岐路に立っていたと言えよう。

ベルクソンは、『二源泉』の末尾で、つぎのような有名な言葉を書き残している。

「人類(l'humanite)はみずからが行ったもろもろの進歩の重荷のもとで、なかば押し潰されて呻いている。人類はその将来がまさにみずからにかかっていることを、十分わきまえてはいない。まず、人類がなすべきことは、人類が生存しつづけることを欲しているのかどうかを、見きわめることである。つぎに人類がなすべきことは、たんに生存することだけを欲しているのか、それともそのほかに、神々をつくりだすマシーヌである宇宙の本質的はたらきが、完遂に欠かせない努力を、抗らうわが惑星のうえにまでも、ゆきわたらせることになるかどうかを、みずからに問うてみることである」。(1)

二十世紀も終わろうとしている今、先進諸国はポスト産業社会、情報化社会に変わりつつあるとは言われながらも、世界はある意味でこの三十年代といろいろな点で類似的な様相をしめしているばかりでなく、むしろ本質的にはこの時代に生じてきた基本的問題を解決できないまま、環境問題や核問題やエネルギー問題、人口問題、南北格差問題など、新たな難問も荷重されて、いっそう複雑で、ぬきさしならない状況に陥っていると言えよう。いわゆる東西の冷戦の終結以降も旧ユーゴや旧ソ連、あるいはアフリカ、中近東、アジア、アメリカなど世界中と言っていいほどの各地で、民族的・宗教的対立や戦闘、殺傷、虐殺、凌辱などが繰り返されている。

科学・技術の発展にもかかわらず、もしくは軍事科学先行のゆがんだ進歩のゆえに、人間生活は真の豊かさや文化的ふかまりを確保できないまま、市場経済中心の資本主義的な「おカネ」と「もの」へのフェティシズムをますます昂進させて、こころの荒廃を増幅させている。

ここではベルクソンが『道徳と宗教の二源泉』で提示した「開かれた社会」と「閉じた社会」の対比という、周知のコンセプトをてがかりにして、現代の社会倫理問題にアプローチしてみたい。

1

人間は生誕以来、死にいたるまで何らかの集団のなかで、集団に帰属しつつ、集団と一定の距離をおきながら生きている。したがって、ひとりの個人として集団もしくは複数の他者とどのように関係していくかは、人間生活にとってきわめて重要な課題と言える。

問題を明確化するため、かなり単純で簡略な図式的分類にしたがって、人間の集団とのかかわりにおける在り方を、より閉じた性質のものから、より開いた性質のものへ分けてみることにする。したがってここでは、とくにゲマインシャフトとゲゼルシャフトとを区別するのではなく、むしろそれら全体を通じて、開くものと閉じるものという観点から整理していくことにする。

A (より閉じた在り方)	B (双性的なもの)	C (より開いた在り方)
《共同体》	《グループ・組織》	
《協同的複数の個》		

家族・血族・同族	遊戯・スポーツ集団 (友達・遊び仲間)	社会的
個体 (個人)		

国民 (国家)	学校・地域集団・職業集団 (企業)	公衆
的市民 (公民)		

部族・民族・宗派	趣味・文化・社会活動集団	世
界市民 (人類)		

およそ集団は、どのようなものであれ、おしなべておおかれすくなかれ自己の存立・維持・発展を言わば自己目的的に志向するかのようである。なかにはさらにあきらかに自己増殖や自己拡大・拡張を目指すものもある。

また集団は、求心力・凝集力を機能させることによって、その全体的な統一性（全一性）を保持しようとする。

また、集団は、それぞれ実質的にもまた疑似・仮相的にも自己同一性を保持しようとする。中間的な構成員（身内）の結束をはかり、分裂や離脱や解体を抑え、共通性や同族性を軸として、集団成員の内部的同質化・等質化、いわば精神的・心情的・情緒的結合を組織化する。

しかし、この結合の程度、度合には、集団によってかなりの差があり、また同様の集団のそれぞれの場合でも、その内部の運営の在り方や構成員相互の関係がどのようなものであるか、どこまで成員の自由度や自発性が許容されているか、上部の下部にたいする拘束力の強弱、相互批判や上部を下部がチェックする機能が作動しているかによって、相当程度の偏差が存在している。

まず家族の場合をとりあげてみると、一般にそこにおける人間相互関係をつらぬいている絆は、きわめて密接である。おたがいが空間的に時間的にそれほど重なりあっていなかったとしても、また愛情とか親愛の情がそれほど濃厚でなかったとしても、同一性にもとづく帰属意識・同族意識はほとんど自明のものとして作用している。つまり、そこでは、自他、内外、身内・よそ者、同類・他人の差異は歴然としている。したがって、そこでは、生活上の共同性を軸として、基本的には閉じる傾向性のほうが、開く傾向性よりより強く働いているということができよう。家族関係にもとづく家庭が、外部のトラブルや外部からの侵食・侵入を防ぐ垣根もしくは防波堤の役割をはたしていると言われる所以のものがある。

つぎに幼児が家族の圏内を越えて入り込むことになるのが、近所のだいたい同年配の子供たちとの遊戯集団である。ここにおいては、概しておとなの世界とは異なる序列やルールが成立している。しかし、当然のことながら社会や国家などの集団の規範や慣習を分有し内在化させている家庭における家族関係において形成され、育成された意識がひきずられ、もちこまれてくると、親や年長者やテレビなどの影響を受けやすく、模倣的行動が主で、まだ十分な自立性が養われていないため、ときにはむしろゆがんだ形や、より特徴の肥大化した状態で、家族的同定化、一体性、協調性が先行して、開く傾向と閉じる傾向とが雑居している。

かくして、家族の一員でもあり、またどこかの遊び仲間の一員であるという甲羅を背につけたまま、しだいにそうした背景や地盤に吸収され、回収されつくせない個体存在としての精神的自立に向かう個人が、浮かび上がってくる。最初のうちは、地と図の関係でいえば、変換的な不安定さを保持しているし、それ以降もときとして可逆性につきまといつづけてはい

るが、やがて精神が成長し、成熟していくにつれて、よりはっきりした性格のものとして個体（個人）性が身につけられるようになる。

個人とは、理念的にはなんびとによっても代替され得ない、個的な存在といことであって、自己の存在の独自性に目覚め、いわば生まれるときも独り、死ぬときも独りという、人間実存の根本状況を基盤として、自己の行動や思想・信条・信仰を選びとった存在を意味する。それぞれの個人は、一個の生命体であるということにおいて、生まれや出身、人種、性別、年齢などによって差別されることのない、相互に対等な価値を有している。しかし、共同体の束縛や温床から距離を置いて、このような個人として自立し、みずからの責任において自己を保ち、かつ他者にたいして自己の行動に関して責任を負うことができるようになるには、かなりの時間と精神的成長と種々の条件がととのう必要がある。

国籍という意味では、出生届けが受理されたときから、どこかの国家の国民ということにはなるが、実際に国民の一人として扱われるのは、わがくには、健康診断や病気など医療機関の対象となり、予防注射を義務づけられるか、いわゆる義務教育の課程に編入されるかするときあたりからであろう。民生委員が保護や相談の対象として、住民票などの書類にもとづいて連絡をとるようになるのも、この時期あたりからと思われる。

国家は国民にたいして、法（憲法）のもとにおける一定の権利を認め、安全の保護と福祉を行うと同時に、納税をはじめとする一定の義務を課し、法律に従うよう公権力を行使する。特定の社会・政治制度やイデオロギー、宗教などが力を得ている場合には、表むきには基本的人権の尊重や擁護がうたわれていたとしても、実際的には、多くの場合一定の価値観、倫理観にもとづいた思想統制、もしくは困い込み、同調が陰に陽に強いられる。

ここでは、いわゆる国家の本質をめぐる「国家論」にふみこむことはしないが、主権の名によって政治的にも法制的にも抑圧的権力支配が機能している事実を否定することはできない。しかし、同時にその公共的機能がある程度まで、国民の福祉や社会的存立に寄与している事実も見過ごすことはできない。この二重構造的機能が国家にたいする幻想を再生産していることは確かであろう。ある意味では、国家は家族と並んで、もっとも閉じた性格をもつ一種の共同体である。それゆえ、ほとんど自明のものとして、成員にたいして協調や協力、結束や結合を基軸にした帰属意識、仲間意識を要求し、自他の明確な区別、差異を前提としたもっとも身近で親密な関係が育成され、助長される。

出生ならびに生活の土地、言語、風俗、生活様式、習慣、慣習（しきたり）、儀礼、社会通念・常識、モラル、宗教、神話、歴史など、さまざま

な自然的・文化的共通性を媒介として、長い年月のあいだに、同一の国家の国民という閉鎖的・自足的意識が形成され、閉じた性格を濃厚に備えた一定の価値観や理念が知らず知らずのうちにはぐくまれていく。広い意味で言えば、普遍的でグローバルな人類社会のなかに特定の国家が存在するのであって、人間は自分が生まれ、育った国家に対する責務以前に、本来は国家を越えたもっと普遍的な開かれた人類的立場において、社会全体に対して一人の人間として、もしくは国民という枠を越えた社会化された個、世界市民として責務を負っているものと言うべきであろう。

2

周知のように、ベルクソンは生物進化が二つの生命・意識の極に向かって進んできたものと考えている。一方は節足動物—昆虫の中間の膜翅類—ハチやアリなど、他方は脊椎動物—哺乳類の中間のニンゲンである。ハチやアリにあっては、意識は本能となり、ニンゲンにおいては、知性になったものと解している。ハチやアリも集団生活を営み、独特の社会を形成する。それはまさに本能にもとづく有機体的社会である。

しかし、人間の社会はアリやハチの社会のように、個々の成員の行動様式や規則性、秩序のすべてが本能によってあらかじめ規定されているのではなく、個体の選択にある程度の自由度が許されている。本能オンリーではなく、知性が働く余地があり、それに関連して規則性や秩序が作用しているものと見なされている。

その場合いわば第一の自然たる本能に代わるはたらきをしているものは、第二の自然としての習慣（慣習）*habitude*である。この習慣こそが、社会の基礎をなし、社会の存立を制約するとともに、習慣の強力な力が強度においても規則性においても、本能の力に匹敵するものと言われている。

(1)

ベルクソンの議論にかぎらず、人間の社会、とりわけ国家（ポリス）の組成・構成もしくは機関を、人体になぞらえたり、それをモデルにして一種の有機体として考える構想は、プラトンの思い描くポリスの場合をはじめ、ホップズのコモンウェルスでも同様に、再三登場してくる。あるいは血や土地の共通を基盤とする有機体的民族・文化共同体をもって国家と考える右翼的ロマンティシズムの議論も少なくない。しかし、ベルクソンの場合は、本能に基づく自然的結合、さらには有機体的全体にたいする個の従属ばかりを強調するのではなく、知性の働きと個人の自由を重視し、役割の後退した本能の働きを補完し、知性を補うものとして、本能と知性の中間にも位する習慣の作用に注意をはらっている。その意味で、ベルクソ

ン自身が明言しているわけではないが、ラスキのようなイギリス風の多元国家論に含意されている開く方向への性格を、知性に託して期待していると言えるかも知れない。

じつは、この習慣の問題こそ、集団の凝集力や相互融合作用、成員間の同調化を解く鍵ともなるところであるし、これが何らかの制度に積分されて固定化されるとき、本能にひそむ閉じる性格をひきつぐある種の閉じる作用として代替されがちなことに注目する必要があるものと考えられる。

習慣について、ベルクソンはつぎのように述べている。「当初は知的であるものが、本能を模倣する方向に進んでいく活動こそ、まさしく人間において習慣と呼ばれるものにほかならない。また、もっとも強力な習慣、その力があらゆる集積された諸力から、あらゆる成分的な社会習慣から作りだされている習慣は、必然的に本能をもっともよく真似たものである」。

(2) いろいろな習慣のメカニズムの全体は、本能に匹敵する。

ベルクソンは、そこまでは触れていないが、この昆虫の場合の社会構成的本能に代わる人間の場合の習慣の作用は、本能のような生得的固定化はないものの、直接知性に結びつくというよりは、むしろ知性から離れていて、多分に感情や情念、さらには意識以前の下意识もしくは無意識につながりをもつという点において、たいへんに厄介な性格を担っていることに留意しなければならない。

個々の成員に通底する共同性が不確かな場合、ややもすれば成員それぞれは、私意や私欲にもとづいて別々な方向に拡散し、ばらばらになるか、互いに衝突するか、無関心なままで、まとまりを維持することが困難になるであろう。その際、無定型な成員の志向をむすびつけ、接着剤か粘着材のような働きをして、一定の方向に誘導するものが習慣であろう。

つまりある集団が、自己同一性や閉鎖性、あるいは排他性や求心性をもつメカニズムの根底には、まさしく習慣の作用がはたらいており、それは知性的であるのではなくて、むしろそれはほとんどその集団自身の、固有の、あたかも「生きんとする盲目意志」とも言うべきものによって侵されていること、それはまさに頑固で、フレキシビリティに欠ける一種の惰性的な作用、強力な感情的意識によって支えられていて、冒し難く、慣性的通念、信念、もしくは潜在的固定観念として成員に共有されてしまっていると言うことができよう。

ソクラテスが衝突し、それを批判したがゆえに、はげしい反感と非難、さらには憎しみと攻撃にさらされることになったのも、ポリスにおける多くの成員に浸透していた無意識的な習慣と習性化した行動様式、固着的・自己防衛的な閉じた性格の価値観であったと考えることができよう。

ホルクハイマーは、『哲学の社会的機能』で、ソクラテスの問いについて、つぎのように述べている。「神々によって認可された習慣Sittelnに服従せよとの要求、伝統的な生活様式に無条件で適応せよとの要求に反対してソクラテスが主張したものは、人間はみずからの行為を認識しなければならないし、自分自身の運命をみずから形づくらなければならないということであった。彼の守護神は、彼の内に、すなわち彼の理性と意志のうちに住んでいる」。(3)

多くのひとは、ことがらそのものの善悪、適否を、そのつど事情や状況に照らし合わせて、原理原則にのっとってみずから判断することを省略するか、面倒がって、習慣にしたがうことで手間暇や努力をないがしろにする。本質や理念とのかかわりで慎重に検討することよりも、通例や先例に依存する簡便な経済性が優先する。また、自分が無意識のうちによりかかり、安心できる身上のペースになっている習慣・しきたり、それにつながる思考図式が混乱したり、無効化することに、極度の反発やアレルギーを示すことになる。

モンテーニュがその『エッセー』の第一卷二十三章で、各民族・人種、各地域における奇習や悪習の類いの数々を列挙して、愚劣とも言うべき日常の習慣から脱することのできない人間の現実とその限界に、きびしい眼差しを注いだことは、よく知られているところである。モンテーニュにかぎらず、いわゆる「人性批評家」と呼ばれるモラリストたちは、もっぱら人間における習慣の愚かしさ、悲惨さ、化け物性とそこから脱することのできない因循な人間のおぞましさについて語っている。

もともと、パスカルは、『パンセ』の断章のひとつで、モンテーニュの民衆蔑視とも言うべき姿勢に異議をとらえ、ひとびとは多くの習慣のなかから良きものを選びとる良識をもっていることを指摘している。その点に伝統と評価しうるものになるか、それとも因習となるかの境があり、その区別には事実においてはかなり微妙なところがあることになる。

人間の思考（認識）や行動にかんして習慣のもっている重要な作用については、イギリスの経験論の流れもヒュームに代表されるように、つとに着目されてきたところであるし、人間論もしくは社会認識の鍵ともなるものである。また、近代以降のフランスの思想もモンテーニュ以来、いろいろな角度から習慣にかんして論及してきた。メヌ・ド・ピランもそのひとりである。タルドの模倣理論にはじまると言われる社会心理学や、最近のブルデューの独特のハビトゥス論（身体化された歴史、主観的構造となった客観的構造、構造化する構造）にいたるまで、文化人類学やエコロジーで問題になる生物の棲息地や住みわけ、生物環境などにおよぶ広い意味

における習慣の問題は、おおきなテーマとして、形を変えて継承され、発展させられてきたとすることができよう。

ベルクソンの『二源泉』における説明は、その意味でも議論そのものとしては取り立てて新しいとは言えないにしても、そこから問題を一層発展させて、開く社会と閉じる社会（開かれた社会と閉じた社会）、開く魂と閉じる魂（開かれた魂と閉じた魂）という観点と重ねあわせて考えてみると、たいへん示唆に富んだ問題意識を提示しているものと言えよう。

3

すでに見てきたように、集団はそれを一種の有機体とみるにせよ、成員の組織化による相互関係としてみるにせよ、それぞれに閉じる性質もしくは傾向が内在していることを認めないわけにはいかない。「実際、われわれの文明社会は、それもまた閉じた社会である」(4)と、ベルクソンは言う。ときにそれは、成員の自由を圧縮し、ほとんど自立性を許容しないほどまでに、リジッドな結合や同一化を成員個人に要求し、強制し、それからはずれたり、逆らったりする人間に猛烈な圧力を加え、ときには集団から排除したり、排斥したりする暴力を作用させたりする。「文明社会も本質としては、各々の時期に、一定数の個人を包含するばかりで、他の個人を排除することに変わりはない」。(5)

そのようなメカニズムは、ある点では、集団の自己防衛や他の集団への対抗でもあったりするために、簡単にいちがいに否定するわけにはいかない。ただし、同調しない個人を造反分子として迫害したり、分派として圧殺したりすることや、構成や傾向の異なる集団を異質なものとして敵視したり、軽蔑したりするなど、あきらかに行き過ぎや過剰反応の場合も少なくないので、閉じる傾向を助長したりするのでなく、なんとかして緩和するか、反対に開く方向に集団内部から改革して、閉鎖性や排他性を減少ないしは弱体化して開放する必要がある。

つまり、かりに観念として、閉じる傾向に批判的であったとしても、日常の生活のスタイルや行動様式として、あるいは価値観や好みや癖などとして習慣化し、無意識のうちに身につき、もっとも根底の感情や情念として、いわばそれぞれのひとの思想・信念・意識が身体化し、血肉化し、ある意味では構造化しているので、改変することは容易ではない。それではどうすれば閉じる方向の動きに歯止めをかけ、開く方向に一步でも二歩でも進めることができるであろうか。言葉で自由を叫び、希求するだけではどうにもならない。また、たんなる心掛けや精神性の問題としてかたづけすることもできない。いわんや愚かしい心情や遅れた意識として指弾し、非難するだけでは、問題を解決することはほとんど困難であろうし、まっ

たく無効であろう。

動物の社会生活を規制している生得的な本能の作用が後退し、知性にゆだねられるようになったとはいいいながら、知性は本能に匹敵するほどの自然的な統合力や必然的な結合力をもちあわせてはいないため、その知性の限界を補うものとして、習慣に依存せざるをえない現実をふまえて、なんらかの解決策を考えていくほかはなかろう。これはまた、「社会は個体を自己に従属させるのにければ存続しえないし、また個体をなすがままにしておく *laissez-faire* のでなければ進歩しえない」(6) という矛盾をいかうまく調停することができるのかにかかっているとも言える。

ベルクソンは、原始的自然状態から今日の文明社会への変化を、いわば有機体的アリ塚さながらの緊密な連帯的結合関係の状態から、人間が本能の自縛から次第に離れて、それに代わるものとして自然から与えられた知性を発揮することによって、連帯性が緩められていくなかで、人間がある種の自由を獲得し、それによって社会も利益を得られることになった動的な過程としてとらえている。

したがって、ベルクソンの議論は、一見すると社会や個人を実体化して、社会か個人かの二項対立的な二者択一の立場をとっているかのように受け取られかねないが、じつはそうではなく、社会にしても個人(個体)にしても、主としてその相互作用的关系性にもとづいて、機能的に概念化されていることを忘れることはできない。

生得的な素質という点では、原始人も文明人もさしたる違いはないはずであるから、もしその間に差異があるとすれば、子供のときから身につけ、次第にたくわえられていくものにおいて生じてきたと理解するほかはない。

「幾世紀もの文明の間における人類のすべての獲得物がそこに、子供のかたわらに、子供に教えられる学問のなかに、また伝統やもろもろの制度や慣習 *usages* のなかに、子供が話すことをまなぶ言語のシンタックスや語彙のなかに、子供を取り囲む人々の身振りのなかにまで根をおろしている。もともとの自然の岩盤を今日覆っているものは、まさにこの分厚い腐葉土層にほかならない」。(7)

つまり、習慣を基礎として人間特有の文化が構成されてきたということであって、そこに言わば人類の知性の営みの成果が結実しているということであろう。「・・・自由は(生物の)生命の低い段階から高い段階にいたるまで、鎖につながれていて、せいぜい鎖を伸ばしゆるめることがおこるだけである。人間とともに はじめて、とつぜん飛躍が行われ、鎖が断ち切られる。人間の脳は、実際のところ、動物の脳にたいへんよく似ているが、人間の場合には特別のところがある。それは、どんなに凝り固まった習慣

にも、べつな習慣を対抗させ、どんな自動的運動にも、相反する自動的運動を対抗させる手段を提供するところのものである」。 (8) ここに閉じる方向を、開く方向に転換する方策の鍵が示唆されているように思える。

習慣のそなえている閉ざす性格的傾向を、こんどは知性と連動させることによって、それが同時にふくんでいる開いていく働きを助長して、のぞましい習慣に転化し、変質させること、あるいはそれにとってかわらせることが期待される。

集団という問題にもどって言えば、閉ざされがちな組織を開く方向にむかって改変するためには、成員の組織内における自由を最大限に発揮させること、既存の権威や不合理なしきたりに盲従するのではなく、また先例や慣例やせまいセクショナリズムに流されるのではなく、各自が自発性を高め、集団全体の目標や理想を見出して、創意工夫をこらし、マンネリやルーティンの消化にとどまることなく、みずから積極的に行動することが必要であろう。風通しがわるい、淀んだ状態に停滞するのではなく、つねに新しい風がふきぬけていくような、内部の流動化、更新化がはかられるべきであろう。

人員の配置やポストが、固定化したり、ある個人や特定の人々の人脈や派によって長期にわたって占められることがないように、たとえ専門的な、あるいは管理的な仕事であれ、担当者は短期に交替し、ポジションがヒエラルキー化しないように、いわゆるピラミッド型やトリー型でなく、相互横断的、多層交差的ネット状もしくはリゾーム状になるようにすべきであろう。

角度を変えて、ひろく社会全般ということで考えれば、社会全体の公的な利益・福祉よりも、私的・個人的利益や仲間の幸福を優先して、自己中心的に、内部求心的にそれに固着し、執着するのではなく、外部や他者に対して、みずからを開き、遠心的に行動していくことが大切であろう。

たとえば、国家にしても、企業にしても、学校にしても、家庭にしても、同一性にこだわることなく、どんどん外の人、異種のひとを、対等な資格、条件で迎え入れる必要があろう。結婚とか、養子とかいうことについても、教師とか、弁護士、医師とかいうことについても、人的交流を通じて国際化がすすむことが、閉塞性を打破するひとつの早道であろう。いわれのない差別は、閉じる動きと連動していると考えられる。異なる、見知らぬ (エトランジュな)、なじみのない習慣、文化への経験不足と固定観念が、差別の温床になっているものと言えよう。

異なる人種や民族間の確執や衝突、無理解や忌避をひきおこす原因のひとつは、言語や文化、宗教やモラルの違い、相互性の困難さにあると思わ

れる。しかし、それらは、長い年月をかけて、育てられ、蓄えられてきた遺産でもあり、貴重な伝統でもあるのだから、それらを否定したり、均一化したり、どれかに一元的に同化することは、まったくの逆行であり、無謀な暴力的作用にほかならない。

たとえば、言語について言えば、一国内においても標準語なるものに統一するなどの試みは、折角の各地域特有のことばの価値をないがしろにする暴挙というべきであろう。たしかに、共通に使える言葉は、必要だとしても、それはそのかぎりで意味のあることであって、それぞれの地域のひとが、昔から伝承され、みがきあげられてきた郷土的地域語（方言）を使い、残すことは、理の当然でもあり、そこにこそ多様な文化の意味があると言えよう。

では、国際的にはどうであろうか。ドルが国際通貨としてひとり通用した時代は、終わろうとしている。英語も同様であろう。では、かつてのエスペラント語のような人工言語は、妥当するであろうか。おそらく、無理であろう。かりに近い将来EUの共通通貨が成立するとしても、EU加盟の西欧諸国のいくつもの民族が、同じ単一の言語をもちいることにはならないであろう。まさにここに、ある種の習慣の侵し難い力がある。

したがって、多種多様で、それぞれが独自性をそなえている文化を、どれかひとつに強制的に統合しようとしても、うまくいくはずもないし、それはしてはならないことであろう。つまり、なぜならそれは、まさに開くことではなく、また新たにべつなものに閉じ込め、閉ざそうとする試みにほかならないからである。

人間がひとりひとり別々で、それぞれが個性をもっていて、その個性を生かすことによってしか自由がなりたたないように、集団や社会や民族や国家の場合も、それぞれのまとまりの全体とその成員ひとりひとりの個性を尊重し、それを伸ばし、はぐくみ育て、充実させていくことによってしか、人類に向かって飛躍することはできないであろう。個別性や特殊性を否定し、超越することによっては、普遍性に到達することはできないであろう。むしろ、それぞれの文化の独自性をより深め、内に充実させることによって、閉塞的な自己満足を打破し、より外に向かって開かれたものにするのであろう。

それぞれの個体が、自立し、独立しつつ、他者と共存し、協力しながら、みずからの属する集団を開き、開放し、自由に活動できるためには、間主体的な関係性を生きる客体＝主体として、自己を開くことによって、自分とは異なる他者との相互理解と交通を実現していくことがめざされるべきであろう。それには、なによりも自分とは異質な個性をそなえる他者の痛

みや苦しみにへの配慮、他者の存在の重さを引き受ける勇気を欠かすことができないであろう。

また、そのためには、知性を高め、ベルクソンの言う知性以上のものへと飛躍させることによって、みずから習慣をよく導くことができるようになる必要がある。みずから自身を開放し、閉ざそうとする習慣やもろもろの自縛や自己抑圧からみずからを解放することによってしか、社会を開くことはできないであろう。

「道徳においては純粹に静的なもの *le pur statique* は、知性以下 *infra-intellectuel* に属するであろうし、純粹に動的なもの *le pur dynamique* は、知性以上 *supra-intellectuel* に属するであろう。静的なものは自然によって求められたものだし、動的なものは人間の天性の出資分である。また、前者はもろもろの習慣の総体の特徴づけるものであり、それは人間においては動物のある種の本能に対称的に照応するところのものである。つまりそれは、知性以下のものである。後者は渴望であり、直観であり、情動である」。(9)

ベルクソンとともに、自然との共生をはかりながら、円のうちに閉じ込められた行動から、自由な空間へとみずからを展開する行動へ、繰り返しから創造へ、知性以下から知性以上へ飛躍する動きと自由の達成に希望を託したい。

(1) Henri Bergson, *Les deux sources de la morale et de la religion*. p. 21. PUF

(2) *ibid.*, . p. 20. (以下同書DSと略記)

(3) Max Horkheimer, *Kritische Theorie Band 2*. p. 300. S. Fischer

(4) (5) *DE.*, . p. 25.

(6) Henri Bergson, *L'energie spirituelle*. p. 26. PUF (以下同書ESと略記)

(7) *DS.*, . p. 83.

(8) *ES.*, . p. 20.

(9) *DS.*, . p. 63.

